

気絶と覚醒を繰り返す快樂の無限ループに嵌っており、希乃子は深過ぎるアクメの底無し沼に沈み続けてしまう。

ラブラブドスケベ生ハメセックスの快樂に溺れているアクラと希乃子であったが、それを間近で羨ましそうに見詰めている黒髪の美少女——”小大 唯”の姿があった。二人の情事を見ながら自分を慰める行為では我慢が出来なくなった彼女は、現在進行形で希乃子に腰を打ち付けるアラクの腕に抱き付くことで自分の存在をアピールする。

「んっ♡♡ 私もいる……っ♡♡♡」

「勿論、唯のことも忘れてないよ。んむっ、ちゅぷう……っ」

希乃子よりも先に墮とされてしまっているアクラ専用のオンナである唯は、彼の二の腕をたわわに実ったデカパイを挟み込みながら愛情タップリの口付けをした。当然のように彼女の下腹部には淫らな淫紋が刻み付けられており、下腹部が彼との赤ちゃんを孕んでいることによって僅かに膨らんでいる。

上半身も下半身も自分のことが大好きな美少女達に愛されているアクラは、複数の女性に愛されるハーレムの醍醐味である快樂と幸福を堪能していた。

——ドッチュンっ!!!♡♡♡♡ バチュンっ!!!♡♡ バッチ` ユンっッ!!!♡♡♡

「お` ——っッ` ♡♡♡ おちんぼキノコ膨らんでるう` ~っ♡♡ おまんこの奥でザーメン胞子いっぱい出されるうっ♡♡♡♡ お` っき` ゆう` ううう` う` う~~~~っッ` ♡♡♡」
「じゅるるうっ♡♡ れるお~っ♡♡♡♡ ぢゅぷるるうっ♡♡♡ んむ……っ♡♡ ぷはあーっ♡♡♡♡ アクラあ……っ♡♡ すきい~っ♡♡♡ れるるお` ~っッ` ♡♡♡♡」

興奮と性感の高まりに合わせて希乃子へのピストンと唯とのディープキスは更に激しくなっている、アクラはグツグツに煮詰まったスペルマをオマンコの最奥で解き放つために腰を全力で叩き付ける。

——ドッチ` ユンっッ` !!!!!♡♡♡♡♡♡♡

「お` っほお` おお` お` お` お` ——っッ` ??!!!!♡♡♡♡♡♡」

—ぶびゅッ♡♡♡ ぶびゅっ♡ どびゆるるるる” う” ッ♡♡ どびゅびゅッ”♡♡ ぶ
びゅっ♡ ぶびゅびゅびゅびゅびゅびゅぶう”っ♡♡ どびゅぶる” る” るるる” る” る” う”
—っ♡♡♡ ぶびゅぶッ”♡♡ びゅぶッ♡ どびゅぶぶぶぶぶぶぶぶう” —っッ”
♡♡♡♡ どびゆる” る” るる” る” るるる” う” ッッ”♡♡ どびゅッ♡ ぶびゅぶる” る”
るる” るる” る” る” う” ……っ♡♡♡ びゅぶぶぶぶる” る” るる” う”っ♡♡♡ どっびゅ
ぶッ♡♡ どびゆるる” る” ……ぶっびゅう”♡♡

「ん” き” ゆう” うう” う” ———っッ”?!♡♡♡♡ きっ、きたあ”っ♡♡♡ ん” ッ
ほお” お” おおお” お” おお” お” おお” お” お”お~~~~~っッ”??!!!
♡♡♡♡♡ 濃くてっ♡♡ ドロドロがあ”っ♡ いっぱい注がれてるノコお” ~っッ”
♡♡♡♡ あ” ひい” ……っ”♡♡ イ” っき” ゆう”っ♡♡♡ いく” いくいく”、イ” っく
” ううう” ううう” うう” う” ううう” う” ———っッ”♡♡♡♡♡ お”
—っッ”♡♡♡♡」

ガロンやリトルという大量のスペルマがオマンコに注ぎ込まれていき、強烈過ぎる快楽により希乃子は深い絶頂を迎えて意識を飛ばしてしまう。快感を少しでも逃そうとする彼女は濁音に彩られた絶叫を上げ、『ビクンっ♡♡ ビクンッ♡♡♡』と肢体を震わせて潮か尿かも分からない淫液を大量に噴き出す。

—ぶっしゅう” うう” う” うう” ~~~~~っッ”♡♡♡♡♡♡ ぶしゅッ♡♡ ぶっ
しゅう” うう” う” ううう” う” うう” う” ———っッ”♡♡♡♡♡

中出しアクメの気持ち良さを覚えてしまっている希乃子は、下腹部に刻まれた淫紋をビカビカと光らせて視覚的に絶頂を迎えていることを伝えている。強過ぎる快楽を処理し切れない彼女は意識を飛ばしたり覚醒したりを繰り返しているのだが、蕩け切ったメスの表情が浮かんでおり悦びによって口端は上がっていた。

「ぢゅぶるるう~~~~っッ”♡♡♡♡ れるお~~~~っ♡♡ んちゅうっ♡♡♡ ふう” —っッ”
♡♡ ふう”っ♡ じゅずずう……っ♡♡♡ れるるお~~~~っ♡♡♡」

希乃子に対して数分間にも及ぶ種付け射精をしている間でさえ、アクラは唯との蛞蝓同士の交尾を彷彿とさせる濃厚なディープキスをしている。二つの舌でタップリと掻き混ぜられてブクブクと泡立った唾液が口端から零れてしまっており、彼は発情したメスの甘ったるい香りや揉み解されたマシュマロおっぱいの感触を同時に楽しんでいた。

「れるるお〜っ♡♡♡ じゅるるう……っ♡♡ —んむっ♡♡♡♡ ぶはあ——っ♡♡
はあっ♡♡♡ ……次は私っ♡♡」

「勿論！！ 唯のオマンコもタップリハメ潰して上げる。順番に精液をタップリ注ぎ込んで、一足先に妊婦みたいなお腹にするよ！」

「〜〜〜っ♡♡♡♡♡♡♡ ん……っ♡♡ ちゅぷうっ♡♡♡」

「お`ひ——っ♡♡♡ まだいっぱい出てるノコお`〜っ♡♡♡」

自分もタップリと愛して貰えることを伝えられた唯は、普段の無表情からは考えられない位に嬉しそうな笑みを浮かべながら頷き再び口付けをする。その間も希乃子は子宮に特濃ザーメンを大量に注ぎ込まれ続けており、絶頂を迎えた状態のまま戻って来られずに野太い嬌声を上げていた。

その後も唯と希乃子は交互にオチンポで可愛がられてしまい、身体の外も中も黄ばんだ白濁液でドロドロに塗り潰されたのである。彼女達は完全にハメ潰されて潰れたカエルのような無様な体勢になりながら全身をビクビクと痙攣させ、淫魔王の個性を持っているアクラは性行為をする前よりも更に元気になっていた。

「「……………っ♡♡♡♡」」

「ふうーっ、可愛い女の子達とのセックス最高っ！」

希乃子達以外にも雄英高校ヒーロー科一年B組の美少女達を次々と墮としているアクラは、淫魔王という自分の個性を更に開花させながら性欲も増している。彼はもっともっと美少女や美女を気持ち良くして幸せにしたいと欲望が湧き上がっており、クラスメイト以外の女の子にも手を伸ばそうと考えていた。

「うーん、次はどの子にしようかなあ」

女教師という単語からエロい先生や目を付けているサポート科の美少女、はたまた三年生のお姉さんなど様々な候補が上がるのだが、最終的には顔を合わせる機会が多いヒーロー科一年A組の女の子に琴線が触れる。B組に勝るとも劣らぬA組の美少女達を想像しながら誰から墮としていこうかと思案するアクラは、同年代とは思えないグラマラスなドスケベボディの持ち主であるお嬢様の姿を思い浮かべた。

「色々候補は思い浮かぶんだけど、やっぱり隣のクラスのA組からだよね。前から気になってたおっぱいもお尻も大きいあの子から墮とそうか……」

たわわに実った巨乳やムッチリとした桃尻を思い浮かべるアクラは、一年A組のクラス副委員長である”八百万 桃”にターゲットを定めたのである。

雄英高校に入学してから自分の強さへの自信を半ば失いつつあった八百万 百が、アクラからの『百はもっと強くなれますよ』という言葉に縋ったのは半ば必然であった。

「——あっ♡♡♡ あっ、アクラ様あ……っ♡♡ ん` う——っ♡♡♡ こっ、これは本当に強くなるためのお♡♡♡♡ ”特訓”なのでしょうかあ……っ♡♡ ん` ツひゅう` ううう` う` う~~~~っ♡♡♡」

「ちゃんとした特訓だから安心してね。淫魔王の個性のお陰で俺が揉みしだいたら、おっぱいもお尻も大きくなるよ。百は創造の個性を使用する時に脂肪を消費しちゃうんだから、サイズアップすればもっと大胆に個性を使えるようになる」

「たっ、確かにい……っ♡♡ んひっ♡ 理にかなっておりますわあ♡♡♡ あ——っ♡♡」

言葉巧みに百のことを納得させながら快樂に染め上げているアクラの姿は、伝承として残っている女性を誘惑して孕ませる淫魔（インキュバス）そのものである。そして、彼は止めを刺すために、百の心を動かしてしまう魔法の言葉を囁き掛けるのであった。

「……”強くなりたい”よね？」

「~~~~~っっ` ??!!!♡♡♡♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡ 私もっと強くなりたいですわっ♡♡♡♡ ん` ひゅう` うう` う` ——っ♡♡♡」

淫魔王という個性に秘められた能力の一つとしてアクラは、女性の心の機微が手に取るように分かってしまう。USJ襲撃事件で結果的には足手纏いとなってしまい同じ特待生である轟 焦凍と

の力の差を訓練で感じたことから、喪失しつつある百の自信を取り戻させる序でに快楽に染め上げたいと彼は純粋な善意と性欲から考えている。

——むにゅうううう~~~~っっっ”♡♡♡♡

「お`っき`ゅう`うう`う`うう`う`うう`う`~~~~っっっ”♡♡♡♡♡♡」

たわわに実ったドスケベおっぱいを揉み潰されるだけで快楽が迸り、百はこれまでの人生で一度も出したことのない端ない下品な嬌声を上げてしまう。

淫魔王は性に関しては無数の個性を所有している”オール・フォー・ワン”すら超える万能個性となっており、アクラは女性のおっぱいやお尻を揉むだけでサイズアップさせることも可能であった。元から高校生離れしているグラマラスな体型をしている唯や希乃子は、彼の魔手によってタツプリと揉みしだかれたことによって、バストやヒップサイズがメートル超えというドスケベボディ化に拍車が掛かっている。

「百のデカパイもっと大きくしようね。お尻もタツプリ揉んでもっとデカ尻にします……っ」
「ん`う`——っっ♡♡♡ あ`ひっ♡♡ よっ、よろしくお願ひしますう~~~~っっ♡♡♡♡」

世間知らずであり生粋のお嬢様で騙されやすい性格に加えて押しにも弱い百は、アクラに言われるがままに家まで連れ込まれて友達の家”お泊まり”することになったのだ。そして、部屋に入るや否やたわわに実ったデカパイを揉み潰され、高校一年生の時点で十分過ぎる巨乳を爆乳にするための育乳パイ揉みが始まったのである。

「これから揉みしだいて大きくなるから、百の元のおっぱいのサイズを教えてください？」
「あ`っ♡♡♡♡ あっ♡♡ んう……っ♡♡♡ きゅっ、九十センチのFカップですわっ♡♡
ん`ひゅう`~~~~っっっ”♡♡♡♡」
「大きいね。でも、今日だけで十センチは大きくして上げるからね」
「じゅっ、十センチもですかっ?!♡♡♡♡ ん`ひい~~~~っっ♡♡ いきなりそんなに大き
くう……っ♡♡♡」

雄英高校の制服であるワイシャツ越しに揉みしだかれているのだが、百は強い快感を感じて肢体をビクビクと震わせながら嬌声を上げていた。アクラは揉み応えのあるデカパイの弱点を探るように揉みながら、巧みな指捌きによってプチプチとボタンを外して素肌とブラジャーを丸見えにさせるために脱がせていく。

日焼けしていない真っ白で滑らかな柔肌と共に小玉スイカのようなおっぱいを包み込んでいる黒いスポブラが露わとなり、制服の上からでも丸分かりであったグラマラスなドスケベボディが更に強調されたのである。

「ブラジャーの上からでも柔らかいね」

「~~~~っっ♡♡♡♡ あ——っ♡♡♡ アクラ様の手の感触を強く感じますう……っ♡♡♡♡ ——んあっ♡♡♡」

「でも、ブラジャー越しより直に揉んだ方が大きくなりやすいんだ？ 百の生おっぱい揉みたいな」

「——っっ?!♡♡♡ そっ、それはあ……っ♡♡♡」

普段からヒーローコスチュームで痴女のような格好をしている百だったが、流石に直におっぱいを揉まれるのは恥ずかしくて抵抗があるらしい。だが、アクラはスポブラ越しでも充血してプックリしている乳首を指先でカリカリと引っ搔くように刺激しながら、心も身体も許させる淫魔(インキュバス)のように甘い言葉を囁くのであった。

——カリカリっ♡♡♡♡ カリっ♡♡♡

「あ`ひい`いい`い`い~~~~っっっ`♡♡♡♡ 先っほお……っ♡♡ 駄目ですう~~~~♡♡♡」

「おっぱいが大きくなったら、個性の訓練も沢山出来るよ？ それに気持ち良くなりながら、強くなれるのは良いことだと思わない？」

「ん`ひゅう`~~~~っっ?!♡♡♡♡ たっ、確かにい……っ♡♡ それはそうなのですがあっ♡♡♡♡ い`っひいいい`い`い——っ♡♡♡」

——ぐにっ♡♡ コリコリい……っ♡♡♡♡

「~~~~っっ`?!♡♡♡♡ ん`ひい`~~~~っっ♡ 摘みながらコリコリい`——っ♡♡ お`っほお`おお`お`っ♡♡ しっ、刺激が強過ぎますわあ~~~~っ`♡♡♡」

「百がもっと強くなれるよう協力したい。俺に生おっぱい育てさせてっ」

「——っっ♡♡♡♡ わっ、分かりました……っ♡♡ 分かりましたからあっ♡♡♡♡ 私のおっぱい育てて下さいましっ!!♡♡♡」

こうしてチョロ可愛い百は直におっぱいを揉みしだく許可をしてしまい、アクラは口端を吊り上げる笑みを浮かべながら黒いスポブラに手を掛けたのである。フロントにあるブラホックは簡単

に外されることとなり、まだ男性の指先の感触すら知らない処女雪のような搦き立てのお餅を彷彿とさせるデカパイが勢い良く飛び出した。

——ブチっ♡♡ ブルン——っッ！！♡♡♡♡

「あ——っッ♡♡」

「百のおっぱい本当に綺麗だ。真っ白でお餅みたいでぷっくり膨らんだ乳首もエロい」

「~~~~っッ♡♡♡♡ せっ、説明しないで下さいまし♡♡ ん`う`……っ♡♡♡ 揉みしだいて大きくして下さいっ♡♡」

「それじゃあ……タツプリ揉ませて貰うよっ」

——むんにゆう~~っッ♡♡♡♡

「あ`ひい`いい`い`いい`いいい`い`~~~~っッ♡♡♡♡♡♡」

「手の平全体におっぱいが吸い付きながら、指先が奥まで沈み込んでいくよっ」

ミチミチと筋肉が詰まっておりますしりとした重みを感じられる百のデカパイ、アクラは獲物を捕らえるように両手で鷲掴みにしながら指先を曲げることで揉みしだいている。空気をタツプリと含んだマシュマロのような柔らかさと年若いメス特有のハリがあるモッチリとした柔肌を彼は両手が埋もれるように感じているのだが、ほぼ無意識に指先や手の平を動かすことで更におっぱいの感触を堪能しようとしていた。

——むにゅっッ♡♡♡♡ ぎゅう~~っ♡♡ むぎゅうううう~~~~っッ♡♡♡♡♡♡

「ん`あ`——っッ♡♡♡♡ あ`っ♡♡ あひッ♡♡♡ あっ、アクラ様の手の感触を強く感じますう……っ♡♡♡♡」

「俺も百のおっぱいを両手で感じてる。我慢しないで気持ち良くなってね」

「はっ、はい……っ♡♡♡ 気持ち良いですよっ♡♡ ふあ——っッ♡♡♡♡」

下から掬い上げるようにおっぱいを持ち上げられながら、両手合わせて十本あるアクラの指先が食い込む度に百は強烈な快感を感じてしまう。元から彼女のデカパイは敏感であったのだが、彼の魔手によって物凄い早さで開発が進んでいく。

「あ——っ♡♡♡ てっ、手の平で先っぽが擦れてますう……っ♡♡ あひっ♡♡♡ ビリビリ痺れてえ——っ♡♡ ん` ひい` いい` い` いい` い` ~~~っ♡♡♡♡」

性感が高まりながら乳輪や乳首は更にプックリと膨らんで充血してしまい、手の平が擦れる度に百は電流を流されたかのように肢体を跳ねさせながら甲高い嬌声を上げる。弾力がある乳輪や乳首は手の平に引っ掛かりやすく、それが余計に摩擦を増やして強い快感を感じさせてしまうのであった。

「乳首が擦れるの気持ち良さそう。直接指先で弄ったらもっと気持ち良いよ？」

「~~~~っ♡♡♡ ??!!!♡♡♡♡♡♡ だっ、駄目ですう~~っ♡♡ 乳首は刺激が強過ぎますう♡♡♡♡ あ——っ♡♡」

プックリと充血した乳首にアクラの指先が近付けられていき、百は頭を左右にブンブンと振るが止められない。柔らか過ぎるおっぱいによって震え続けている乳首と彼の指先が触れ、そのまま人差し指と中指で挟みながらクリクリと弄られる。

——グニっ♡♡ クリクリい~~っ♡♡♡♡

「あ` ひ——っ♡♡♡♡ ちっ、乳首捏ねるの駄目ですう……っ♡♡ あ` っひい` い` い` い` い` ~~~っ♡♡♡♡♡♡♡♡ 気持ち良過ぎます` う` ~~~っ♡♡♡♡♡♡ ん` ひゅ` う` う` う` う` う` う` う` ——っ♡♡♡♡♡♡♡♡」

性感帯の中でも敏感な乳首を指先で捏ね回すように可愛がられてしまい、手の平に擦れる時に感じていた痺れるような快感が数倍に跳ね上がって常に続く。腰や首を限界まで逸らしながらおっぱいを突き出すような体勢をしており、濁音に彩られた甲高い嬌声を上げながら性感の強い高まりを感じていた。

これまでの人生で感じたことのない快感を感じながら、初めての絶頂を迎えそうになっている百は困惑の声を漏らす。

「お` っ♡♡ あっ、アクラ様あ……っ♡♡♡♡ なっ、何か変ですうっ♡♡ おひ——っ♡♡♡♡♡♡ キち` やいますう` ~~~っ♡♡♡♡」

「それはイクだよ。好きなだけイっちゃえ……イけっ」

——ぐにい~~っ♡♡♡♡♡♡ カリカリっ♡♡♡

「お` ッぎ` ゆう` うう` う` う` う` ——っッ` ?!!♡♡♡♡♡♡ いっ、イきますう`
`っ♡♡♡ アクラさまあ` ~っッ♡♡ イっくら` うう` う` うう` う` うう` う`
` ~~~~~っッ` ♡♡♡♡♡♡」

止めを刺すように乳首を親指と中指で挟まれながら引っ張るように捏ねられ、人差し指の爪先で乳首の先端をカリカリと刺激されたことで遂に果ててしまう。頭の中が真っ白になってしまい、そんな絶頂を迎えてしまうこととなり、百は部屋全体に響くような絶叫を上げながら全てを塗り潰されるような快楽を覚えてしまった。

学校の制服であるスカートの奥にあるショーツの内側では、淫液が『ぴゅうっ♡♡ ぶしゅッ♡♡♡』と噴き出してしまい秘所を濡らす。

「はあ` ——っ♡♡♡ はあ……っ♡♡ い` ひ——ッ♡♡♡♡」
「おっばい弄られるの気持ち良かったでしょ？」
「ん` う` ~っッ♡♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡ ふう` ——っ♡♡♡ こんなのお……っ♡♡ 知らなかったですうっ♡♡」

——むぎゅう~~~~っ♡♡♡♡

「あ` ひい` い` い` いい` い` ~~~~~っッ` ?!!♡♡♡♡♡♡」
「それじゃあ沢山イキながら、おっばいもっと大きくしようか」
「だっ、駄目ですう……っ♡♡ まだ気持ち良いのが治ってないですからあ♡♡♡♡ イ` っぎゅう` うう` う` うう` うう` う` ~~~~~っッ` ♡♡♡」

絶頂の波が未だに引いていないのに百はおっばいを揉まれ続け、アクラの手によってタツプリと時間を掛けて育乳されてしまうのであった。

「あっ♡♡♡ またキちゃいますう……っ♡♡ アクラさまあ~~~~っッ` ♡♡♡♡ あ` ひい`
` いい` いい` い` ~~~~~っッ♡♡♡」

「おっ♡♡ いっひ——っ♡♡ あっひいっ いいっ いいっ いっ ~~~っ♡♡♡♡」
「百のおっぱい、大きくなってきたね」
「気持ち良いですう……っ♡♡♡ もう分からないですう~~っ♡♡ おっほおっ おおっ お
っ——っ♡♡♡♡」

あれからアクラによっておっぱいを揉みしだかれ続けた百は、元からの発育の暴力という素養も相俟ってメートル超えの爆乳にまで成長していた。時間を掛けて何度もイキ潰されて立派な性感帯となった彼女のデカパイは、揉み潰される度に甘イキを繰り返してしまっており、彼の手を見るだけで快感が走ってしまう位に調教されている。

「こんなにスケベなおっぱいになって、これなら前よりも沢山個性が使えるよ」
「~~~~っ♡♡♡♡ スケベなおっぱいに育てていただきい……っ♡♡ ありがとうございます
♡♡♡♡」
「これからは毎日揉みますよ。だけど今日はおっぱいだけじゃなくて、お尻も大きくする予定ですから」
「——っ♡♡♡♡ お尻もお願いしますう……っ♡♡」

快楽を覚え込ませるアクラに対して従順なマゾメスとなりつつある百は、お尻を揉みしだかれるのが恥ずかしいのに快感に期待してしまっていた。

「それじゃあ……スカート脱がせるよ」
「~~~~っ♡♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡」

恥ずかしい位に熱気と発情したメスの淫臭が籠っているスカートにアクラは手を伸ばし、ブリーツの内側に隠されているホックを器用に外してチャックをジジジっと下ろしていく。そのまま彼はスカートを脱がせていき、百も恥ずかしそうにしながらもお尻を上げて足先から抜けてパサッと床に落ちる。

—むわあ……っ♡♡♡♡

「百の脚凄く綺麗だよ。それにショーツがぐっしょり濡れてる」
「〜〜〜っっッ♡♡♡♡ いっ、言わないで下さい……っ♡♡」

モデルのように長くてスラリとしているのに太ももはムチっとしている美しさとエロさが共存した脚が露わとなり、絶頂を迎える度に噴き出した愛液や潮でぐっしょりと濡れたスポブラと同色のショーツが見えていた。ショーツは色気よりも動きやすさを重視しているデザインであったが、ドスケベボディの百が着用しているため十分過ぎる程にエッチであり、身体のラインが丸分かりになっているため寧ろエロさが増している。

「お尻が揉み易い体勢の方が良いから、ベッドの上で四つん這いになって貰おうか」
「分かりましたあ……っ♡♡♡ んうッ♡ こっ、こうでしょうか？♡♡」

アクラに言われるがままに百はベッドの上で四つん這いとなり、お尻をツンと突き出すような体勢となった。彼の視界には迫力すら感じられる桃のようなお尻が一杯に映し出され、ハートを逆さにしたような持ち上がっているのが余計に瑞々しさを感じさせる。

「元気な赤ちゃんが産めそうな安産型のお尻だね」
「はっ、恥ずかしいですう……っ♡♡♡ んっ♡ アクラ様の視線を感じてえ♡♡♡ あっ♡♡ 早く揉んで下さいッ♡♡♡♡」
「うん、タツプリ揉ませて貰うよ」

—むぎゅう” うう” う”〜〜〜っっッ”♡♡♡♡♡♡

「あ” ツひい” いい” い” いいい” いい” い”〜〜〜っっッ”♡♡♡♡」
「揉み応え抜群。柔らかいのに弾力があって、こんなの——」

—バチンっ！！♡♡

「い” ひ——っっッ”？！！♡♡♡♡」
「叩かない方が失礼でしょっ」

両手でおっぱいよりも弾力のあるデカ尻を揉みしだくアクラは、余りにも極上の感触に加虐心を刺激されてしまったのか左手で揉んだまま右手で平手打ちをしてしまう。突然の衝撃によって両の目を限界まで見開いてしまう百だったが、痛みは殆ど感じずにマゾヒズムが入り混じった快感を覚えていた。

——バチンっ！！♡♡♡ ベチンッ！♡ バッチンっ！！！！♡♡♡♡

「お” ひッ♡♡♡ あくらさまあ”っ♡♡ 叩いちゃダメですう～～っッ”♡♡♡♡ ん”ひいい”い”いい”い”～～～っッ？！！♡♡♡」

部屋の中には左右に尻肉を平手で叩かれる破裂音が断続的に響き、それに合わせて百は明らかに快感を感じている嬌声を上げている。処女雪のように真っ白で丸々とした尻タブは、少しずつ赤みを増しながら腫れていく。

「こんなに叩いて欲しそうなエロ尻してるのが悪い。おっぱいを揉んでた時も思ってたけど、百は強引にされる方が感じてるよ。本当はマゾメスなんだ」

「～～～～っッ”??!!!♡♡♡♡♡♡ ちっ、違いますう……っ♡♡ あんッ♡♡ わっ、私はマゾメスなどではあ——お”っひい～～っッ”♡♡♡♡」

否定しようとする百だったがお尻を叩かれる度に甘い痺れが全身に駆け巡り、ビクビクと肢体を震わせながら甘ったるい喘ぎ声を漏らしてしまっていた。円を描くように尻タブの柔肉を撫で回されながら何度も平手で叩かれる度、強い快感と僅かな痛みがドロドロのシェイクのように掻き混ぜられてマゾメスとして育てられる。

百の中でお尻を叩かれるのは気持ち良いに自動で変換されるようになり、ビクンビクンと肢体を震わせながら尻肉を波打たせるように揺らしていた。

「お”……っ♡♡♡♡ お”ひ——ッ♡♡ ひい”……っッ♡♡♡」

「お尻イジメられるの気持ち良いでしょ？」

「～～～～っッ”?!!♡♡♡ きっ、気持ち良いですう……っ♡♡ お”——ッ♡♡♡ 私 はあっ♡♡ お尻が叩かれるのが好きですッ♡♡♡♡ お”っほお”おお”お”～～～～っッ”♡♡♡♡♡」

真っ赤に腫れ上がったお尻を揉みしだかれながらアクラに囁かれ、百は恥ずかしさも忘れて従順になるながらお尻を叩かれるのが好きだと宣言してしまう。ショーツの奥にある縦の割れ目か

らはメスのフェロモンを含んだ淫液が溢れており、滑らかでムチムチとした太ももの内側は粘っこい体液で濡れて艶めかしい光沢を帯びている。

アクラは太ももの内側をスリスリと撫で回しながら、ぐっしょりと濡れているショーツを脱がして良いかを聞く。

「もっとお尻を可愛がって上げたいけど、下着が邪魔だから脱がせてもいい？」
「ん`ふう` ~っッ?! !♡♡♡♡ さっ、流石にそれはあ……ッ♡♡ お`ひ——っッ`♡♡♡ 太ももお`っ♡♡ 撫でちゃダメですわあ……っッ♡♡♡♡」

秘所に近い部分を触られる快感から太ももをキュッと閉じるが、愛液によってヌルヌルであるため余計にアクラの手感触を強く感じてしまう。悩まし気に腰をクネらせているのだが、それでは快楽を逃すことが出来ない。

ヌチュヌチュと粘っこい水音を響かせながら、アクラはもっと強い快楽に誘おうとする。

「おっぱいも直接触られた方が気持ち良かったでしょ？」
「それは——っ♡♡ ん`あ`ッ♡ そうですねっ♡♡♡」
「直接お尻触られたらまた沢山イける。それに……オマンコはおっぱいやお尻の何十倍も気持ちいいよ？」
「~~~~~っッ`??!!!♡♡♡♡ 何十倍っ!?♡♡ そんなの壊れてしまいますっ♡♡♡」

自分が何度も絶頂を迎えたおっぱいやマゾメスとして育てられたお尻、その何十倍もオマンコが気持ち良いと聞いた百は怯えと共に未知への興味を抱いてしまった。アクラの愛撫によって快楽は良い物だと教え込まれているため、もっと気持ち良くなれることを教えて欲しいと思ってしまうのである。

「おっぱいやお尻よりも気持ち良い……っ♡♡ 沢山イってしまいますわっ♡♡♡ んあ——っッ♡♡」

ぎゅっと閉じていた百の太ももが少しずつ緩んでいき、それは恥ずかしさよりも好奇心が勝ってしまった証拠であった。右手をムチムチの太ももで挟まれていたアクラにもその変化は丸分かりであり、嬉しそうな笑みを浮かべながらぐっしょりと濡れ過ぎて意味がなくなっているショーツに両手を伸ばす。

「いっぱい気持ち良くしてあげる」
「~~~~っっッ`??!!!♡♡♡♡♡♡♡」

——しゅるっ♡♡ ぬちゅう~~っ♡♡♡ ムワ……ッ♡♡

抵抗すること無くショーツはスルリと脱がされることとなり、粘っこい愛液の糸を引いているツルツルの秘所と共に蒸れたメス臭が広がる。恥ずかしい位にびっしょりと濡れそぼっているパイパンおまんこ、ふっくらとした肉厚な割れ目は挿入したら絶対に気持ち良いと思わせる美しさとエロさが共存していた。

「百のおまんこエッチだよ」
「まっ、まじまじと見ないで下さいませい♡♡♡ んぁ——っッ♡♡」
「それじゃあ触っていくよ」

——クチュっ♡♡

「あゝ ひいゝ いいゝ いいゝ ~~~~~っっッ`??!!!♡♡♡♡♡♡♡」

トロトロに濡れそぼった秘所と指先が触れ合い小さな水音が鳴り、部屋の中には快楽に呑まれるメスの絶叫が響き渡る。

——ぢゅっぽっ♡♡♡ ぐच्चゅっ♡♡ じゅっぷっ♡♡♡♡ ぐチュっ♡♡

「おゝ ～っっッ♡♡♡♡ イゝ グっ♡♡ またイゝ っちゝ やいますゝ うゝ ～っっッ♡♡♡ おゝ まんこゝ スポスポだめですゝ うゝ ううゝ うゝ ううゝ うゝ ～～～～っっッ♡♡♡♡ イゝ っきゝ ゆうゝ ううゝ うゝ ううゝ うゝ ううゝ うゝ ——っッ♡♡♡♡♡♡」

——ぶしゅっ♡♡♡♡ ぶしっ♡♡ ぶっしゅうゝ ううゝ うゝ うゝ～～～っっッ♡♡♡

たわわに実ったおっぱいを潰すように上半身をベッドに突っ伏させ、真っ赤に腫れ上がった桃尻だけをツンと天井に向かって突き出している百は、激しい水音を立てながら膣孔を穿られる快感によって強烈な絶頂を迎えて潮を吹き散らしていた。

「オマンコ弱々で可愛いよ。百が好きなタイミングでイって良いからね」
「イギゝ ますうゝ っ♡♡ ずっとイってゝ ますゝ うゝ ～っっッ♡♡♡ おゝ ひ——っ♡♡」

ショーツを脱がされてから直ぐに秘所への愛撫が始まったのだが、元から敏感な体質である百はおまんこアクメを直ぐに覚えてしまったのである。絶頂を迎える度に潮を吹き散らしてしまう彼女の股下には、淫液をシートがタップリと吸収したことで大きなおねしょの染みが出来上がっていた。

女の子を気持ち良くしてイかせるのが大好きであるアクラは、ご満悦と言った様子で手マンをし続けて百の処女おまんこをトロトロに解している。

「もう奥までトロトロだ。これなら俺のオチンポも挿入りそうだよ」
「～～～っっッ♡♡♡♡ そっ、それは子作りになってしまいますう～～っ♡♡ いゝ っきゅっ♡♡♡ せっ、性行為は愛する男女がするものですわっ♡♡」
「それなら俺達がしても問題ないね。俺は百のこと大好きだよ。沢山子作りしたいっ」
「——っっッ??!!!♡♡♡♡♡♡」

アクラから子作りの提案に加えて好きだと告白されてしまい、百は声にならない声を上げる程に驚いてしまう。ドクンドクンと高鳴っていた心臓の鼓動は更に激しくなり、お臍の奥にある子宮がキュンキュンと疼いてしまった。

膣孔全体が痙攣するようにアクラの人差し指と中指を締め付け、粘っこい愛蜜を溢れさせる量が更に増えている。彼は挿入している二本の指を折り曲げたり伸ばすことで淫らな水音を鳴らしながら、百に自分のことをどう思っているのかを問い掛けるのであった。

「百は俺のこと好き？」

「あっ、アクラ様のごことはっ♡♡♡ あひっ♡♡ おっ、お慕いしておりますけどお……っ♡♡♡」

「それなら相思相愛だ。指じゃ届かなかった奥まで太くて長いオチンポで突き回して、子宮に濃い精液をお腹一杯になるまでタップリ注ぎたい」

「あ————っ♡♡♡♡」

数え切れない位に絶頂を迎えたアクラの指より太くて長い魔羅、それに子宮を突かれる想像をってしまった百は相思相愛を否定することが出来なくなる。何度も絶頂を迎えさせられたことで気持ち良いことが大好きになっている彼女は、もっと強烈なセックスの気持ち良さを知りたいとってしまったのだ。

「本当に嫌だったら我慢するけど、百は二人で気持ち良くなれるセックスしたくない？」

「そっ、それはあ……っ♡♡♡ はあ`ーっ♡♡ ふう`……っ♡♡♡ シたいですっ♡♡
アクラ様とセックスしたいですわあ♡♡♡♡

「二人で沢山愛し合って、気持ちよくなるうね」

「~~~~~っっッ`??!!!♡♡♡♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡♡」

個性の強化のためにおっぱいやお尻を大きくするより、二人で愛し合い気持ち良くなるのが目的となってしまったのである。

——グググ……っ♡♡ ブルンっ!!!♡♡♡♡

「な——っ?!♡♡♡♡」

「ふうーっ、開放感凄い。ずっと窮屈だったから」

「こっ、これが殿方の……っ♡♡♡ んあ——っ♡ こっ、こんなに大きいものなのでしょう
かっ♡♡♡♡」

当然のように衣服を脱いでいったアクラであったが、ズボンとパンツを纏めて脱ぎ捨てた瞬間に腕のような剛直が飛び出した。ガチガチに怒張している魔羅は三十センチの物差しと比較しても余裕で長くて手首よりも太いという人外レベルとなっており、天井を突き刺すように反り返っているソレに百は見惚れている。

寝台の上で四つん這いになっている百の背後で膝立ちになるアクラは、デカ尻の谷間に勃起したオチンポを乗せた。

「あっ♡♡ 熱くて硬いのがあっ♡♡♡」

「これが今から百のおまんこに挿入いるからね」

「——っっッ♡♡♡♡♡」

——ぬちゅっ♡♡♡ ぢゅりゅう〜っ♡♡ ずりゅりゅうッ♡♡♡♡

「お`っひい`〜っッ♡♡♡♡ おまんこにい……っ♡♡ 擦り付けちゃ駄目ですう♡♡♡
ん`ひゅう`うう`うう`う`〜〜〜っっッ♡♡♡♡」

「挿入前にちゃんと濡らしてるよ」

アクラは愛液を溢れさせ続けている縦筋のような割れ目に龟头をズリズリと擦り付けて、交尾用に分泌された愛蜜という名の天然のローション塗れとなったオチンポを作り出して性行為の準備は万端となる。

——グチュっ♡♡♡♡

「あ`ひ——っッ`?!♡♡♡」

「俺のオチンポの先っぽと百のオマンコの入り口がキスしてるよ」

「はっ、はいっ♡♡ ん`う`……っ♡ オチンポが当たってますう〜っ♡♡」

「それじゃあ……挿入れますよっ！」

そう宣言したアクラは腰にグッと力を入れて、トロトロに解された処女おまんこに魔羅を挿入していく。解していた人差し指と中指と比較しても何倍も極太である逸物が、膣孔をミチミチと押し拡げていくのであった。

——ずっぷう” ～～っッ♡♡♡♡ ごりゆりゆうっ♡♡ ブチッ♡ じゅぷり” ゆりゆり
” ゆう～～～っッ” ♡♡♡♡♡♡

「お” っほお” ～～っッ！！??♡♡♡♡ アクラ様のオチンポお” っ♡♡ い” ぎ” ゆっ
♡♡♡ お” く” まで入って” いぎ” まじゅう” ～～～～っッ” ♡♡♡♡」

「ミッチリ詰まった襞々がオチンポに絡み付いて、奥に行けば行く程狭くなりながら先っぽが刺
激される……っ」

ミミズ千匹と呼ばれる無数の襞と奥に行く程狭くなる構造によって、挿入しているアクラのペ
ニスに強烈な刺激を与えている。極上のドスケベボディに加えて名器である百は最高のハメ穴と
なっており、彼は自分の逸物を根本まで挿入して征服したいという欲望に掻き立てられるので
あった。

そして、子宮口と亀頭が口付けをするように密着するのだが、それでも根本まで挿入し切れな
いため奥へと押し込まれていく。

「根本まで受け入れてっ。俺専用の穴になれ——っ」

「お” ぎ” ゆ——っッ” ♡♡♡♡ お” く” まではいってき” ます” う” ～～っッ” ♡♡
ん” ほお” おお” お” お” おお” おお” おお” お” ～～～～っッ” ♡♡♡♡♡♡」

ずっぷりと根本まで魔羅が挿入された頃には、百は再び上半身を突っ伏させていた。

「はあ……っ、根本まで挿入ったよ」

「お” ひ——っ♡♡♡ お” ……っ♡ お” っほお” おお” お” ～～～～っッ♡♡♡♡」

「次は引き抜いて、また挿入れるピストンだね。百の子宮を餅搗きしながら、オマンコをゴリゴ
リ穿って上げるっ」

「～～～っッ” ♡♡♡♡ おっ、お待ちくださいっ♡♡ まっ、まだ慣れてないですからあ
——っ♡♡♡ お” ——ッ♡♡」

ピストンが齧す快樂に怯える百であったが、アクラは快樂に染まる女性が大好きなため余計に
勢い良く腰を動かしてしまう。

——ずり” ゆッ♡♡ ごり” ゆりゆり” ゆり” ゆう” ～～～～っッ” ♡♡♡♡♡♡

「ん` き` ゆ——っツ` ?!!♡♡♡♡ お` っき` ゆう` うう` う` うう` う` うう` う`
` ~~~~~っツ` ♡♡♡♡ お` っ、オチンポがなかで暴れてます` う` ——っツ`
` ♡♡♡♡ い` き` ゆう` ——っツ` ♡♡♡」

ぎゅうぎゅうと締め付けていた膣孔から強引に魔羅が引き抜かれ、膣壁ごと持っていきそうな肉厚カリ首がゴリゴリと掘削する。余すこと無くオマンコ全体を強れるに刺激されてしまい、百は上半身をバタバタと上下させるように跳ねながらイキ潰れてしまった。

最奥から入り口の辺りまで引き抜かれる間に百は何度も絶頂を迎えてしまったが、ピストンとは何度も挿入と引き抜きが繰り返されることなのである。

「百が忘れられなくなるまで、セックスの気持ち良さ教えて上げるからね——っ!!」

——ドツチュンっツ` !!!!!♡♡♡♡♡♡

「あ` き` ゆう` うう` う` うう` う` うう` う` ~~~~~っツ` !!????
♡♡♡♡♡♡」
「好きなだけイケっ」

アクラは絶対に逃げられないように百へと覆い被さり、そのまま真っ赤に腫れ上がった桃尻に腰を打ち付けるピストンが始まった。平手でデカ尻を叩いていた時よりも大きくて柔らかそうな破裂音が断続的に木霊しながら、それ以上に快楽に蕩け切った濁音に塗れた彼女の嬌声が部屋の中に反響する。

規格外のデカチンにハメ潰される快楽を百は覚えてしまい、もうアクラにセックスして貰えないと満足出来なくなってしまう。

——バチュンっ!!♡♡♡ ドツチ` ユンっツ!!!!♡♡♡♡ バツチュンっ!!♡♡

「お` っほお` おおお` お` お` お` ~~~~~っツ` ?!!♡♡♡♡ ぴし` ゆどんっ♡♡
` ぴじゅどんしゅごいでしゅう` うう` う` う` う` う~~~~っツ♡♡♡♡ い` ッぎ` ゆう` うう`
` う` うう` う` うう` う` ——っツ` ♡♡♡♡♡♡」

「これがセックスだよ。気持ち良いでしょ!!」
「ぎ` っ、気持ちよしゅぎへえ` っ♡♡♡♡ お` かし` く` なっちゃいまし` ゆうう` う` う`
う` う` ~~~~~っツ` ♡♡♡♡」

抽送が繰り返される度に百は深いアクメに堕ちていき、潮を吹き散らしてしまっていた。特に子宮を鳩尾まで押し込まれながら潰される度、ポルチオ性感帯の開発が進んでいき更に気持ち良いが強くなっていく。

遂にはお尻を持ち上げていることさえ出来なくなり、百はベッドに突っ伏したままハメ潰される。

「セックス好き？」

「しゅぎっ♡♡ しゅぎれず`う` ~っっ`♡♡♡♡ おまんこズポズポすきい`っ♡♡」

寝バックによって子宮の逃げ場は失われることとなって、余計に快楽が強くなった百は常に絶頂を上書きされ続ける状態となってしまう。そして、アクメによってビクビクと痙攣しながら締め付け続ける名器が与える快楽は凄まじく、アクラの性感は高まりながら種付けするためのザーメンが暴れ始める。

「射精すっ、射精すよ——っ！！ 百の奥にいっぱい射精すからっ！」

「~~~~っっ`♡♡♡♡ だっ、出して下さい~~~~っ♡♡♡」

ラストスパートのようにこれまでよりも激しいピストンが行われ、それに合わせて部屋全体に破裂音と母音塗れの嬌声が響き渡った。

そして——

「射精るっ。孕めえっ！！」

——ドツヂュンっっ`！！！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡

「お`ぎゅ——っ？！！♡♡♡♡」

渾身の叩き付けによって豊満な尻肉は押し潰されてしまい、子宮をべったんこに潰されながら子宮口が亀頭に突き刺さる。グツグツに煮詰まったスペルマが睪丸から溢れ出して、長い陰茎を通りながら亀頭の先端から放出された。

——どびゅぶッ♡♡♡ どぶびゆるるるる” う” ッ♡♡ ぶびゅッ”♡♡ ぶびゅっ♡ ど
びゅびゅびゅびゅぶぶぶッ♡♡ ぶびゅぶる” る” るるる” る” る” う” ——っ♡♡♡ びゅ
ぶッ”♡♡ びゅぶッ♡ ぶびゅぶぶぶぶぶぶぶぶぶ” ——っッ”♡♡♡♡ どびゆる” る” る
る” る” るるる” う” っッ”♡♡ どびゅッ♡ びゅぶるるるるるるるるるう……っ♡♡♡ びゅ
ぶぶぶぶう” っ♡♡♡ びゅぶッ♡♡ びゆるるる……びゅう” っ♡♡

「お” き” ゆ——っッ♡♡♡♡ おっひい” いい” いい” い” いい” いいい” い” い” い” い～
～～～～～～～～～っっっッ” ッ” ?!!♡♡♡♡♡ い” き” ゆっ♡♡♡ いく” イ” くイ
く” ——っ♡♡ イ” ック” ううう” うウ” ううウ” うう” ウ” う” うううう” うう”
——っっッ”♡♡♡♡♡♡♡」

特濃の子種汁がガロンやリットルという常軌を逸した量、子宮内へと直に注ぎ込まれてパンパンに満たされてしまう。

——ぶちゅっ♡♡ ぶちゅちゅちゅちゅッ♡♡♡

「お” っほお” おおお” お” お” お” ～～～～っっッ” ??!!!♡♡♡♡♡♡」

屈強な精子達が孕みたくないと言っている卵巣を取り囲んでいたため、排卵日などを完全に無視して強制的に卵子を放り出させてしまった。当然のことだが粘っこいスペルマの海の中で卵子が逃げる事など万に一つも不可能であり、無数の精子達に突撃された哀れな卵は双子以上確定の受精卵となってしまう。

「い” ひ——っ♡♡ お” っほお” おお” お” お” お” ………っ♡♡♡♡♡ お” ひ——っ♡♡」

初めての種付けによって百は深過ぎるアクメ沼に溺れており、口から獣のような嬌声を上げることも出来ない。だが、彼女が交尾している相手は淫魔王の個性を持っているアクラであるため、一度の射精で満足することなど例え天地がひっくり返ろうとも有り得ないことなのである。

「はあ——っ、ふう……っ。気持ち良かった？」
「お” ——っっッ”♡♡♡♡ きもちよかったです” ………っ♡♡」
「良かった。この後も沢山気持ち良くして上げるからね」

「あ——っっッ`♡♡♡」

思考することがほぼ出来なくなっている百であったが、これからもっとハメ潰されることを理解してしまう。だが、もうアクラに愛される気持ち良さを知ってしまった彼女は、発情し切ったメスの表情を浮かべながらセックスをおねだりするのであった。

「あっ、アクラ様のオチンポでもっとズポズポして下さいっ♡♡ たくさんっ♡ ナカに出して欲しいですう……っ♡♡♡ あ`ひ——ッ♡♡」

「百のこと寝かせないから——っ」

こうして百は完全にアクラ専用のマゾメスへと堕ちてしまい、二人は本能を剥き出しにした交尾を繰り返したのである。日付が変わった頃には身体の中も外もドロドロのスペルマ塗れとなっており、下腹部に堕ちた証である淫紋を刻まれた彼女は愛情をタップリと込めた騎乗位ご奉仕をしていた。

「あっ♡♡ あッ♡ アクラ様あ……っ♡♡ 愛しておりますう♡♡♡」

「うん、俺も百のこと愛してるよ」